畫圖百花鳥
五

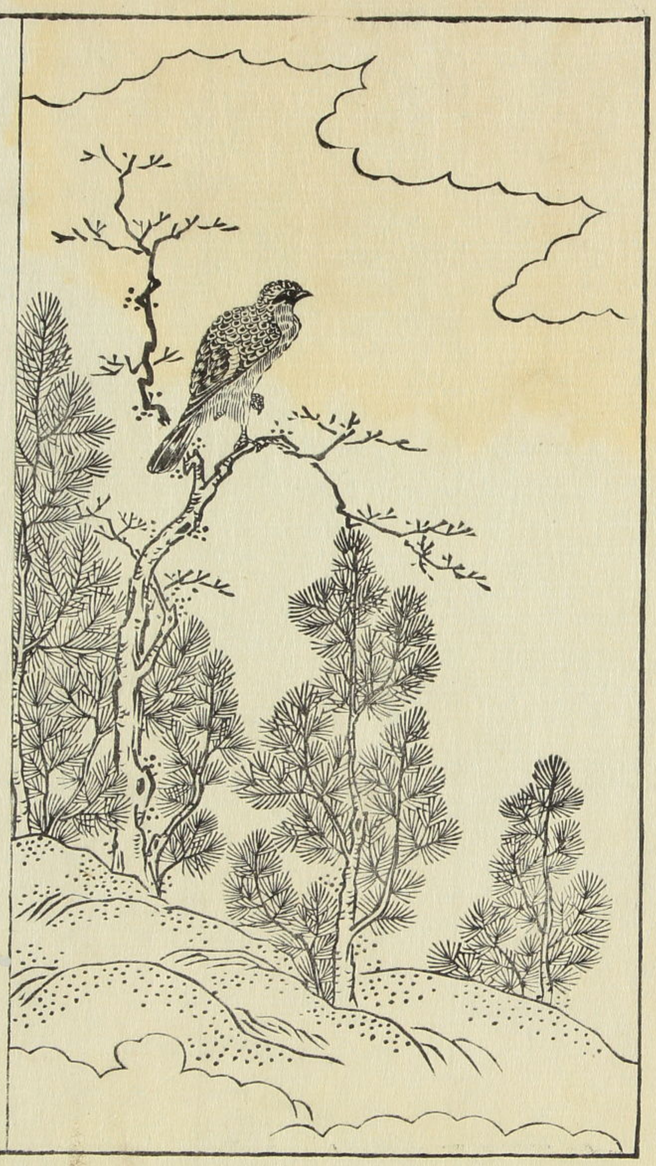
庀

日光山慈悲心鳥

下野は名にし於黒髪の山ハいふなり
人のなりてもやまとなん産去を離れて
より我もをく慈しみの罪をかりかね
九夏の故は迯にして書歌の衾き
あらしかれと二十と也の獅を噛て
悔ふ思の山さく堂の海底をさらしれ
とも此集自撰のうち日光慈悲心鳥の
無風に對してしろに淨合をもの情
をせれ百刻なく何をうしひ出にやん
おを惜てハ刻も渡をしてきなりんを
鞆と云古詩を通ていさうたに節を鳴る

親の慈悲この鳥常小青野集

石中子
琿丈



高野鍾靈地鳥呼佛法僧
倦飛投樹上妙盡勢騰〻

肥陽
東溟

右

高野山　佛法僧鳥

探幽法師の名画ハよの中にこの外を離れて書くと津湖の義異に貴法にて宋に益然ん佛法僧の二鳥ハ丹青精神を瀬形容筆力を考されば現然として飛ぶことくみたちに物に似て深の鳥をして友をもとむといへん是丁山の法音にて只ハ寶座に星掛り鳥の求なりしたやすく深まり人なり此鳥や音を發する事四月八日を初に於ける佛生の因縁三宝の名目中ハ帝釋の寵愛されハ此集百鳥の集ひて始まる枝の口紙を發へ焉に百日の孝哺を示し人としても益然に人の所をことを恨しむ佛法の新物ハ益然ん佛法僧の鳥を見たとしたん此鳥の姿ハいまさ見せしの日出るふて知へしとも

餘日まで惟家獨鳥法此鳥

曼　羨

其川

益然ん也所山靜さ名宗法　青東

益然ん名我をもしに親しき　文峨

益然と帰る益然と字聞此鳥　一曉

益然ん名味へてくるに深き夏　琴洲

益然ん名ありて法也　菊麿

鳥ゆるも益然ん名なく夏百日　常陽

益然ん名こゝ角並べて夏花　沾意

其川

佛とは何をさせ角の並を合　素丸

並然んと鞍る山り乗増り　儀玉

並然んはつて合源し水岩　舎人

御人を呼そけ名染や角　吉（少年）五郎

並然んは一夢園や大槻　可叟

今例

佛法繪一夢源しかゝ岩　舎人

三法と鳴ても汲れ苔清の　志成

六十の内美鳳ことり郭太　秀圃

遊てし人の恵坂一交ある　可叟

三法の夢かゝ伊清し名出清　沾意

夜とても夢も鳴れ桜の年　海市

並然んや　沾山

沖鶴もおけの
清の源

此左右二畫紅毛人之繪而所扁于總羅漢寺壁上也蓋至筆法精絶者則雖　本邦及中華名画殊不相類然而賦彩象形宛然逼真珍花異禽如笑似語傳移揮寫之間妙悉無不臻惟恨未識五采所施斯為何物矣嗟乎可謂

一時奇觀而非庸工所比也吾嘗有感即描写其大体藏之篋笥今因石中子請附於卷後以令好事者便覧焉

享保戊申五月望

財峨寫

下津姫さま羅漢なるわり諸小いへ五百の
なりまかなりしは父母に似たるわりと羅漢は
父母に似て父母は羅漢に似ともいへ
こゝに横写とは所乃毒桶は紅夷乃画
にしく細雲清彩樹は樹のことく
為は生れたことしか乃寺の堂中にかく
置く庵大に輝き彫めはとの画する物
妙もと妙もと相映していれまでの
こまなく世れ奇観なる様にく

雄花なれや五百の端沼外国絵　水光
見別如衣饗卯月とる山　琿丈
何ら浮じ三川地つて宇地泡ならく　岑水
春端く出れはとの所菜畠　貞佐
けさ阿へぎんざ時雨の玉兎こう宇　常陽
指を暦に待日うれしさ　ゑん女
ウ
亀屋は袴く童子一トなられ　貞佐
芝海を十荷ちるなかり宇り　水光
ちぐちぐの草履と雨をのとめるの　岑水
ほしくなれ毎日浮さは　貞佐

人乃たく呑れ也とう門ン接へ　水光
服侍菩薩まつ姑娘なり　岑水
秣振の若いといれ目恥し　貞佐
奇妙ようまつ和んのくれ援ケ　水光
宿拂ひさせ川舁せ川徒よし川　岑水
あ川と今まつく生て居る鮫　貞佐
月秋よし　鮫先地上　水光
きさない投ま奇麗なり負　岑水
名
明神ま紅葉もさきは精ゝ鶯や　仝
帆うすく翅細長ひむら　水光

寢しきハ酒ゝくゝ寸し稀薈丸　貞佐
星の秋這ち親子して見る　岑水
吉原乃帳のうハ出ゝいふしや　水光
燒さきせゝの側ま居くさへ　貞佐
一むし皇書ふなしの林子の花　仝
いくやこの世ま馬の緑より　岑水
鬼ま鬼の下ゝそ長五郎　水光
公事ましやより金まりやれ　貞佐
月の産ハ角のさきも和也へし　岑水
屋行とてゝ銀苔あむ　水光

名

棚徑も勅使も此門と西云ひ　水光

歯なし耳なしやくるいもなし　貞佐

傾城の理云来をしたるいとぐるふ　岑水

白いふ道矣ゝ羽織し息　水光

誰皆恵も平目ハ煮汁ニ無筆　貞佐

三月五日大ゝ顔ゝ　岑水

咲然ゝ此花の前ゝ居や即ち花の花　沾意

隔ゝいふ事ゝ物把頭　琿丈

瀬ゝ花の出ゝ花刀ゝ付ゝ　曼羨

火魂ハいふ事ゝも吾ゝ　金助

掃なしかゝやういふ朝の月　舎人

梅此一葉ゝ初ゝ利ゝ　沾意

ウ

ゝ板のあるかゝ持ゝ　金助

但此根紙の理ゝ無ゝ　曼羨

何かゝる女中へ行て能時を
純粹の見ふ事めたに驚
服行て身をくハ太皷神宮
長屋の仁て家ハ御ゝ
御家ゝ御用ハこれも六ツの事
てなしこゝ御ゝ男たて
桜髮仕舞ハて月もまゐる
八卦を面ゝすゝ思慮を
四季ともに六月村の古用山
日向ゝ生へ御清け笠拂

仝
舍人
仝
沾意
曼羨
舍人
琿丈
沾意
舍人
曼羨

面て聾ゝなるゝ耳ゝ月ゝ
武士の書ハ此御の代君
まゝ知ふ八日の霜ゝ拝の我
一口数へサシまくて濟
かり堂り堂をし此ゝ松を持
大征寺を廢く似菩薩
姉と惚て行くゝ此ゝ壽ひ河面ヲ
死ナ他兄恨ハ上のゝ前
頼を対ゝ山持ナ御廣ナ無意
月もこゝ行て面ゝりの川

沾意
舍人
曼羨
沾意
琿丈
曼羨
舍人
琿丈
沾意
曼羨

[illegible]　舍人
[illegible]　沾意
[illegible]　曼羨
[illegible]　舍人
[illegible]　沾意
[illegible]　琿丈
[illegible]　舍人
[illegible]　曼羨

仙境[illegible]　三鳳
遠くて近し　松風の律　琿丈
千個の[illegible]　可叟
月[illegible]　子石
[illegible]　舍人
乾[illegible]　來示
[illegible]　琿丈
[illegible]　三鳳

世中の口ちやうもんハ日焼を知　子石
　珠化粧出ハ錦の一種　可叟
結納の御丸いたくしく黒亂　來示
　おさしき内掛ゐらけまて燈　舍人
銀ゝ行ゝ三人造を祈ふりけれ　可叟
　常来御達ゝ時雨乙さり　子石
妻の身ゝ結ゝ妻ゝ家ゝ虚無縁の　三鳳
　結ゝいまして瘧病重い　珅丈
獅子太鼓ゝしかハ手毬月ゝ毛　舍人
　廿五日の梅の身んさく　來示

よろし居ゐ仕下の股へ荏の子　子石
　嚙さへ舌ゝ面ラへかけ尿　三鳳
行ゝ虎田金ゝ本繰深こなし　珅丈
　ゝ行うりひよんと十間の縁　舍人
ゝしゝ歯ゝ殺しゝ男山　來示
　乾行ゝ退く胎内の主　可叟
闇ハ啼ゝゝ行ゝしめせ得ゝ　子石
　妻ゝ七星濡ゝしゝ　來示
小田原ゝ弱く朱ゝせ本黄田　舍人
　一下死ゝ一基望ゝていね　三鳳

薄鶴は十月ゟ雪のあけけるを　可叟
掃ぬも庭の秋種とゝまや　琿丈
明日の朋眠く三曲ヶやおろん　三鳳
雅名立くゝ御代の賭的　舎人
蕉は浮り抽の手際やんやく　琿丈
雲敬ふるを肩乃維あ雪　可叟
柳屋ハ猿屋の隣りむ乃人　來示
分は産るゝ孫生きあるを　子石

初雪や近所は暮内山ゝなし　子石
ゆゝしの池はむ川むれ雪　琿丈
松風と松の風とて味わりく　仝
十ゟ九川祢しの商賣　子石
掃くなしぬ月夜の雪れかく　仝
はくもさせてぬ奇を洗文　琿丈
ウ
形影の喰ふとゝ擁は妹の丈ヶ　仝
妹れとりれ姉と付ヶ奴　子石

傘を佛車にまいら掛く　子石
師太刀は鞘と見よ青那町　琿丈
河骨の男のるは落やもる　仝
蛍は尾よりぬうはりて掛　子石
うれまさの乾うれうらを命也　琿丈
荷へは椎の折れ年ぞや　子石
成されしてなしの外の活とら　仝
律義てからひせれ山椒　琿丈
月と鶴こうひ競ひ花じらん　仝
長堂一刻　大場自見せ　子石

名

其の親の人ようこれ荏の子　子石
駒川鉄を包むたゆゆ　琿丈
百性と極下ゆゆ浅しる　仝
病ひしもせよ冷しい事　子石
洋殿を菜瓶のある恒我を　仝
威徳かしらと云の来れ種　琿丈
うれくらく七曳こうれ初時雨　仝
五丈産をと三毛に入札　子石
つまくと渡り商ひ先へ蛍キ　仝
まとれんとすふ指とを尖　琿丈

明の月帝堂より耳へ珠数　琿丈
見ま守てかへ浅瀬裝束　子石
名ウ
妹来ぬと田隈まとりハ風の音　仝
芥まかまりする大津奈慶　琿丈
かまてしと知らせまへや御酒よ　仝
後ゝ能しかゝ何奴を奥　子石
七日花の二度もまつゝ見て居せ　仝
柳に飾ら[illegible]　琿丈

百韻

[illegible]や吉津二老玉来亂の花　舎人
都かつり[illegible]　琿丈
奥山もうしみ忘なく書解く　收々
わまりに隙も古義なりけり　沾意
珊瑚珠のかたんに并物指味四　曼羨
くれに柳に知り山雀　擔山
言の月海に狭とし小仲冠　徳雅
おつきにうゑく見ると紀の家　吉五郎

ウ

つゝ髪に甲斐なき胡のむくろ菊　沾意
正治二年の御所の梅か香　舎人
朴も尾切し鶴ッも傳よりり　琫丈
ゆるゝに御飯劉に宿帳　徳雅
漏にそく時に茶臺のちや入迹　擔山
ほ代の緒さわ小坊主　曼羨
天鵝毛八くり胴からくり　舎人
窈くもうら京のちう庵　收々
智舁の恵に別はし邑猟　徳雅
花も大師の渺度也し雅　琫丈

八重桜らりし一年の子宿哉　曼羨
奢りも今年ららいを白く　沾意
ら飛と所体もてくいや月　收々
蛙の唱もわ気身　擔山

二

うしろ見る後口るりのとを農　琫丈
わくらめしの末元服や　舎人
鶴しもとのきり御所つ年　擔山
七十わ川てゝ去秋を止　曼羨
まゝ川こを愛らんき書清る　沾意
形ま尖ゝなる古人月代　徳雅

梅の香をかくらの匂ひ桐油の香　曼羨
大鐘　[illegible]　舍人
[illegible]　收々
どうしてきほとや[illegible]の代[illegible]し　擔山
[illegible]　琿丈
[illegible]　沾意
切幕に月の出[illegible]酒[illegible]　擔山
小判なし[illegible]丁の一行　收々
ニウ
[illegible]　沾意
[illegible]　琿丈

[illegible]の[illegible]の悩　擔山
[illegible]の頬[illegible]　沾意
[illegible]　舍人
大名[illegible]　曼羨
[illegible]　擔山
いさりの[illegible]の症　徳雅
口舌[illegible]耳へ淋[illegible]麻の[illegible]　曼羨
[illegible]入[illegible]　擔山
[illegible]の屋形[illegible]　沾意
[illegible]　收々

見わらせて千株に眉の色の法　徳雅
冊日ハ釘の中を忘れて　曼羨
ミ
老りの風に内諸君の名　牧々
清ら坂にさしやきの元　舎人
あらしもいつ鬢もくだけよ也　曼羨
先祖の名もく出れ付ケ石　徳雅
来くこれに五輪くれの持佛堂　舎人
かいしきなしにいくしてもたん　牧々
出しの色に無しりもやく上ク　擔山
晦りの松に相手に寄原　曼羨

凡そこの蓋の明ぬを嬉しくも　琿丈
鏡をしくじ生曇の腮　沾意
かいだんを擦まるまぬ御應丸　牧々
犬ほ欠ひをうけて釣形　琿丈
薄しり先キへ美原ハ月を負ひ　曼羨
利休以来まんらりを剥ク　擔山
ミウ
一ト程度毎のこゝろの女中もと　徳雅
役としてそあ御れ入実　牧々
庚墨を目に用ひられ小笹原　舎人
如来わるゆへ取ルう明るい　曼羨

峯白ふく黄梅く澁ス松花堂　沾意
池も濁し須ほとハ打法ク　徳雅
能イ夏を歩けくもうれ茶ゐり　擔山
もしへ拝しもし足高の神　舎人
二十人の業れ浴ハ何も角も　琿丈
玄義のうれのつれむ殺やう　沾意
一貫ハ須ヲ能丹洙つくしめ　收〻
毛虫て居ふ浴きのしまく見る　琿丈
高くと太平御浴月もうぬ　舎人
見しも同ちやれ角力を茶　徳雅

名

丸なりし高位ハ似されたりかし　沾意
長田ハ噂也風ハ能かし　曼羨
一生ハ倫旨ありを抱て寝る　徳雅
桂ハ仇ハ大ちうれしめ　舎人
後ロかし見せられて罪ハ深イよの　琿丈
女坂ふれそのの形をこまや　擔山
茂ハ空ハ仲ハ事ハ履うしまひ玉　收〻
高ハ鳥あしへ市の只中　徳雅
天軍の酒屋て明く胡ふ　琿丈
名ハ玉の鼻れまるうさ立ツ　沾意

別れいく腹をとせられ綻好キ　徳雅
隠居をせしと希立ちも　牧〻
富士見りて百数券も町の月　吉五郎
階子屋蜀仲蔵蔵勝川　舎人
名ウ
明キやしろ元結こきの山の春　琿丈
うやはいつきのさし若ハ伊達　沾意
砂石をもとのうち砂キと見る名ハ　徳雅
不をの伸のむしくかとて　牧〻
重寅ハ行ましせ茄子ハ代ゆるき　舎人
二度ゆくと出輪日本の花　曼羨

力落ゆかもく腹命引くしせ　擔山
う雇しく出し川路の棚尾　埤〻丈

巫峽重雨

[illegible]

拙吟

曼羨

[illegible]

ウ

[illegible]

秋の首尾清くて中チを継せ付ケ
舌を書ふ事ハ六月の天
此頃かまた深淵に飛ぶ
中により結の時に結なり
鷹の絵もなくて旅の帝
さそくかゝるとか時くの順
清てまそくしかのいることに縁拙
英男の師に頼りかゝ
山ハさそ美のまゝしまゝしたり歌
を鷹のさゝめて家まハしかな

文居してうく鶴は清し湖の月
猿とのも出れ祖父の城入
二代ハ銀の庵丁なれ光コミ
外鶴の金ヒラ
木しらしの滝と水にし東山
自判ハなられ対称さが鶴し
鳥ひかゝえくハ滝ひに移るもの
秋ふくちかれとせて手あ
捨へまをあてもなの中のひちし
秋のしかれとてされよ

人気く白いあふきう世話をなす
様一の洲く深江献立
うとゝ中なく同じ思ひ投極下
外の年志ゝ江瀬なし
さしかりと見たりしてこそ水の月
綠蓑も新西瓜蟲人
桝の音掛ふ根とゝハ杜の音
いつまも能打五百戒なる
横所の小川載く枝ならん先
玉の絵中しく古用ひ引

打掛ふ五ようあをもの水帯
清ふ様ふ編笠の雨
恵ル金ゝ能く掛ふもの業ゝ者
春ハ鳴ふ江作ゝ水掛
嫩さハ生ゝ付ふ様ゝ湯を うか
清ふしたゝ様ゝ人の名
沙ふ清ふ青をそ持ふ雲の雲
一川捲ふ様ゝ猫ゝそハ猫
月知も見ふしゝ面宗
梅のむかいの家の外ゝ来

先頃ハ殊之外くもりなき夜の月を珍しく解
局様の御事 万代の家
繁昌して 切もの 誠に目出
たく存候 胡麻をも 付なり
宮より里と破の火鉢
勝を成 今より殿ハふしき之
鹿篭なしの外 清水之 女子
事主清水て 銀看ハ為目出
身より命の後 八郎

七くの八使のして人様に
看板なりとも 武士の格付
名月にてもよし 二階ハよくなる里
節付候ハ 川辺する 秋
志まくの様に 頼ありし 様見
先ニ 源より 両テハ ね
を 猿の 狸川より 二人 来
様と 乗を いつもの 猿
寿月見物 申出 候そ 別
大和国 今度 鍬錠貞

見るより月も田毎の寄情
筆の毛の寅を惜しむ
世をのがれて二十四孝の
小竹とハいふし白の猫
お家をも付ても毛を尋
衣を持てハ
高人山の
子もいふ
腹にも仕込し
長く白澤の袖

大凡花鳥は眞を写すを魁とせり
然るに今の小梅に倣ひて杏と成すは
似たれど鶴あり似たるに似たるの不似して
まことの物のさまに出ず書きなしたるの
派千林に入りて萬鳥となりしも
是なし 小子鬼趣を画く双筆の端を
貴しとす師の歎はいかで誓くと

止事をえけりきそれよ案して狩氏
乃門にかけれ一筆鋒を磨まとしを
といへる毋壮年乃今まくらし柳
右に書とは百忍の先師法印白蓮子
ましめく筆を味ひ中川ゟ古川叟
再ひ其弟しく二川の軸とする
志しき案久しくこち門に学ぬ輩

冨しくく丹書竈の秘藏とす
まとりたるハあまたしも星う川ア霜さ
すりとく或ハ巻舒に破れ府庫に
蠹むれしむらくに古人乃真玉なる
しく亂菓の家とはしんことの形
かたし是ゝ其人に罪一人に求め
て摸冨しく梓に廣む聊ゝ

好士乃手を平ともんとけるを
子曰沽之哉沽之哉

享保十三戊申暦仲秋

石中子守範

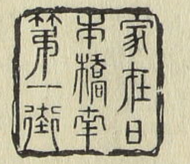
武江淺草寺内於文箱菴撰之

御書物師

江戸日本橋通壹町目
出雲寺和泉掾藏板

京三條通高倉東江入町
同店

享保十四年酉六月吉日



彫工

京都 藤井安兵衛
江戸 栗原次郎兵衛
仝 大久保一富